

論 文

中学生におけるネットいじめの実態
—心理的支援および情報モラル教育のあり方についての検討—

西村麻希

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成27年1月13日受理)

**The Reality of Cyber bullying among Junior High School Students
—Psychological Support and Moral Education —**

Maki NISHIMURA

(Department of Children's Studies, Faculty of children's Studies, Nishikyushu University)

(Accepted January 13, 2015)

Abstract

I conducted a study on Internet usage and the reality of cyberbullying. Participants were 568 junior high school students (298 male and 270 female).

Results showed that around 90% of the participants owned information communication devices such as smartphones and computers; around 50% of them used the Internet almost every day. In addition, regarding the reality of cyberbullying, 16.2% of the participants responded, "I have been a victim of cyberbullying." Furthermore, around 90% of the victims face such situations alone because of reasons including "I am afraid that the situation will get even worse after the consultation" and "Even if I consult with someone, the problem won't be solved anyway," although they feel "hurt" and emotional distress. Moreover, 6.4% of the participants responded, "I've done some problem behavior on the internet before." Many of them said the reasons that had led to the behavior were "I was frustrated" and "I didn't pay any particular attention to it."

These findings suggest that it is important to have the system of psychological support and education counseling in place so that characteristics of cyberbullying such as transmissibility and anonymity and victims' feelings as a result of cyberbullying can carefully be examined. The findings also indicate that it is critical to have moral education which brings students, schools, and families together to work for prevention purposes.

Key Words : Junior high school students 中学生
Cyber bullying ネットいじめ
Psychological support 心理的支援
Moral education 情報モラル教育

1. 問題と目的

近年，“ネット社会”“情報化社会”といわれるように情報技術の発展に伴い、私たちの周りには様々な電子機器が普及し、誰もが容易にインターネットを利用することができる時代になった。その普及率も年々増加しており、平成25年末時点には推定人口の8割を超した¹⁾。

さらに、学校教育現場においても、電子黒板や、タブレット型端末といったICT（Information and Communication Technology；情報通信技術）を活用した教育が全国各地で導入・実用化され始めており²⁾、これらの機器は現代社会を生きる児童・生徒たちにとって、日々の生活から決して欠かすことのできない大切なツールとなっている。

このようなコミュニケーションツールは、年々めまぐるしく発展・普及し、われわれの生活場面で画期的な利便性を発揮する一方で、携帯電話やインターネットを介したトラブル被害や事件は後を絶たないのが現状である。

平成25年の法務省の調べによると、ネットによるプライバシー侵害や名誉棄損といった人権侵害の事案が957件と過去最多にのぼり、前年に比べて42.3%増加したことが報告されている³⁾。さらに、学校教育現場においても、ソーシャル・ネットワーク・サービス（以下、SNS）^{註1}や学校裏サイト、掲示板への悪質な書き込みによる誹謗・中傷という、インターネットを媒介とした“ネットいじめ”による被害やトラブルが深刻化し、その対応も急務となっている^{4,5,6)}。

このような社会状況を鑑み、平成25年6月には「いじめ防止対策推進法」が成立し、その条文においても“インターネットを通しておこなわれる中傷もいじめとして定義づける”ことが明記された⁷⁾。

現代社会を生きる児童・生徒たちにとって、Twitter〔ツイッター〕やLINE〔ライン〕、Facebook〔フェイスブック〕に代表されるSNSは、現存する友人関係を維持し繋ぎとめるツールとして、さらには新しい友人関係を構築し人脈を広げるツールとして、近年、盛んに活用されている。つまり、現代を生きる子どもたちにとって、このようなネット上につくられたコミュニティは、友人関係を築き維持していく上で必要不可欠なものであるといっても過言ではない。

しかし、その一方で“匿名性”や“伝播性”とい

うインターネットがもつ特質を悪用した“いじめのツール”としても利用されることもあり、独りよがりの“つぶやき”がいじめの発端になり得ることも考えられる。このような社会的背景から、児童・生徒のSNSの利用状況およびネットいじめの実態を調査し、今後どのような支援が求められるのかを検討していくことは、学校教育現場におけるいじめへの対応・支援のあり方を考えていく上で重要であると考ええる。

なかでも、児童期から思春期へと移行し、アイデンティティの形成に向けて、友だち同士を中心とした対人関係の充実がより大切になる中学時代においては、心理社会的発達の見点からも重大なテーマのひとつとなることが考えられる。

そこで、本研究においては中学生を研究対象とし、インターネットやSNSの利用状況、さらにはネットいじめの実態について把握し、今後のネットいじめの予防・低減に向けた心理的支援・情報モラル教育のあり方について検討していくことを目的とする。

2. 方法

1) 調査対象

県内の公立中学校に在籍する568名（男子298名、女子270名）の生徒を調査対象とした。

2) 調査期間

平成26年9月中旬

3) 調査方法

授業時間やホームルームの時間を利用し、無記名自己記入方式でアンケート調査を実施した。調査用紙の配布・回収に関しては、各学級の担任教員に依頼した。

4) 調査内容

(1) インターネットの利用状況

ネットの利用実態を把握する為に、①情報通信機器の所有状況、②ネット利用の頻度・目的、③ネット利用上のルールの有無とその内容、④SNSの利用有無について質問をおこなった。

また、インターネットの利用が日常生活にどの程度影響を与えているかを測るために、Young⁸⁾が作成した「ネット依存傾向尺度（Internet Addiction Test；IAT）」を使用した。本尺度は20項目の質問

で構成されており、「いつもある(1点)」から「まったくない(5点)」の5件法で評価していく。

(2) ネットいじめの実態

ネットいじめの実態を把握する為に、「被害経験」「加害経験」という大きく2つの視点から、各経験の有無とその具体的な経験内容について確認をおこなった。

3. 結果

1) 中学生のネット利用の現状について

(1) 「情報通信機器の所有状況」と「利用頻度・利用目的」について

インターネットを使用することのできる機器の所有状況については、調査対象の約9割(91.9%)が「自分が利用できる情報通信機器を持っている」と回答しており、その数は学年が上がるごとに増加していた。中でも、1年生(58.6%)と2年生(95.3%)との学年間における所有率の増加が顕著であった。

また、所有する情報通信機器の機種については「携帯電話・スマートフォン」が47.7%と最も高く、次いで「パソコン(45.4%)」、「ゲーム機(43.5%)」の順に所有率が高くなっていった〔Table. 1〕。

ネットの利用頻度については、いずれの学年においても「ほとんど毎日利用する」と回答しているも

のが最も多く、その数は先述した所有率と同様に、1年生(34.8%)と2年生(62.4%)の学年間における利用頻度の増加が顕著であった〔Table. 2〕。

次に、全調査対象のうちネットユーザー(N=518)のみを抽出し、ネット利用の目的について質問をおこなった。その結果、「動画をみる」と回答していたものが最も多く、全体の約7割(71.7%)を占めていた。次いで「情報検索・調べもの(58.0%)」「SNSをみる・書き込む(55.6%)」の順に多くを占めていた。さらに、学年間においては1年生と2年生間において「メール」「SNSを見る・書き込む」が顕著に増加しており、インターネットを介したコミュニケーションが浸透していることが明らかになった〔Table. 3〕。

(2) ネット利用に関するルールについて

① 自己ルールの有無

ネットを利用する際に自分自身が設定したルール(以下、「自己ルール」と略記)があるか、その有無について質問をおこなったところ、全体の約半数(49.1%)が「特にルールを決めていない」と回答していた。

その一方で、「自己ルールがある」と回答していたものの内訳をみると、「利用時間を決めている」が26.6%と最も多く、次いで「怪

Table. 1 情報通信機器の所有状況

	全体 N=568	性別		学年		
		男子 N=298	女子 N=270	1年生 N=208	2年生 N=149	3年生 N=211
持っている	522 (91.9)	272 (91.3)	250 (92.6)	178 (58.6)	142 (95.3)	202 (95.7)
(内訳) 携帯電話・スマートフォン	271 (47.7)	118 (39.6)	153 (56.7)	70 (33.7)	85 (57.0)	116 (55.0)
タブレット端末	178 (31.3)	79 (26.5)	99 (36.7)	64 (30.8)	44 (29.5)	70 (33.2)
パソコン	258 (45.4)	132 (44.3)	126 (46.7)	76 (36.5)	67 (45.0)	115 (54.5)
ゲーム機	247 (43.5)	160 (53.7)	87 (32.2)	107 (51.4)	68 (45.6)	72 (34.1)
その他	26 (4.6)	12 (4.0)	14 (5.2)	8 (3.8)	9 (6.0)	9 (4.3)
持っていない	46 (8.1)	26 (8.7)	20 (7.4)	30 (14.4)	7 (4.7)	9 (4.3)

実数は人数/()内は%を表記/複数回答可

Table. 2 インターネットの利用頻度

	全体 N=567	性別		学年		
		男子 N=297	女子 N=270	1年生 N=207	2年生 N=149	3年生 N=211
月1回程度	50 (8.8)	36 (12.1)	14 (5.2)	29 (14.0)	10 (6.7)	11 (5.2)
週1回程度	80 (14.1)	36 (12.1)	44 (16.3)	35 (16.9)	16 (10.7)	29 (13.7)
週3~4回程度	105 (18.5)	60 (20.2)	45 (16.7)	38 (18.4)	23 (15.4)	44 (20.9)
ほとんど毎日	283 (49.9)	135 (45.5)	148 (54.8)	72 (34.8)	93 (62.4)	118 (55.9)
インターネットを利用しない	49 (8.6)	30 (10.1)	19 (7.0)	33 (15.9)	7 (4.7)	9 (4.3)

実数は人数/()内は%を表記

Table. 3 インターネットの利用内容

	全体 N=518	性別		学年		
		男子 N=267	女子 N=251	1年生 N=174	2年生 N=142	3年生 N=202
メール	138 (26.6)	52 (19.4)	86 (34.3)	27 (15.4)	48 (33.8)	63 (31.2)
動画をみる	369 (71.7)	187 (69.8)	182 (72.5)	122 (69.7)	98 (69.0)	149 (73.8)
オンラインゲーム	144 (27.7)	91 (34.0)	53 (21.1)	54 (30.9)	41 (28.9)	49 (24.3)
ネット掲示板をみる・書きこむ	45 (8.7)	14 (5.2)	3 (12.4)	16 (9.1)	16 (11.3)	13 (6.4)
SNSをみる・書きこむ	241 (46.4)	98 (36.6)	143 (57.0)	46 (26.3)	79 (55.6)	116 (57.4)
情報検索・調べもの	301 (58.0)	136 (50.7)	165 (65.7)	90 (51.4)	86 (60.6)	125 (61.9)
ネットショッピング	44 (8.5)	17 (6.3)	27 (10.8)	9 (5.1)	9 (6.3)	26 (12.9)
その他	5 (1.0)	2 (0.7)	3 (1.2)	1 (0.6)	2 (1.4)	2 (1.0)

分析対象はネットユーザーのみを抽出/実数は人数/()内は%を表記/複数回答可

Table. 4 インターネット利用上のルール (自己ルール)

	全体 N=519	性別		学年		
		男子 N=268	女子 N=251	1年生 N=175	2年生 N=142	3年生 N=202
自分のルールを決めている	264 (50.9)	123 (45.9)	141 (56.2)	95 (54.3)	71 (50.0)	98 (48.5)
(内訳)						
利用時間を決めている	138 (26.6)	68 (25.4)	70 (27.9)	58 (33.1)	33 (23.2)	47 (23.3)
利用場所・場面を決めている	76 (14.6)	25 (9.3)	51 (20.3)	26 (14.9)	18 (12.7)	32 (15.8)
上限金額を決めている	42 (8.1)	16 (6.0)	26 (10.4)	15 (8.6)	13 (9.2)	14 (6.9)
利用内容を決めている (アクセス制限)	88 (17.0)	36 (13.4)	52 (20.7)	30 (17.1)	23 (16.2)	35 (17.3)
その他	11 (2.1)	3 (1.1)	8 (3.2)	4 (2.3)	2 (1.4)	5 (2.5)
特にルールを決めていない	255 (49.1)	145 (54.1)	110 (43.8)	80 (45.7)	71 (50.0)	104 (51.5)

実数は人数/()内は%を表記/複数回答可

Table. 5 インターネット利用上のルール (家庭内ルール)

	全体 N=519	性別		学年		
		男子 N=268	女子 N=251	1年生 N=175	2年生 N=142	3年生 N=202
家庭内のルールがある	254 (48.9)	116 (43.3)	138 (55.0)	91 (52.0)	66 (46.5)	97 (48.0)
(内訳)						
利用時間を決めている	137 (26.4)	65 (24.6)	72 (28.7)	57 (32.6)	29 (20.4)	51 (25.2)
利用場所・場面を決めている	65 (12.5)	24 (9.0)	41 (16.3)	19 (10.9)	17 (12.0)	29 (14.4)
上限金額を決めている	47 (9.1)	17 (6.3)	30 (12.0)	13 (7.4)	19 (13.4)	15 (7.4)
利用内容を決めている (アクセス制限)	101 (19.5)	41 (15.3)	60 (23.9)	36 (20.6)	27 (19.0)	38 (18.8)
その他	3 (0.6)	1 (0.4)	2 (0.8)	1 (0.6)	1 (0.7)	1 (0.5)
特にルールを決めていない	265 (51.1)	152 (56.7)	113 (45.0)	84 (48.0)	76 (53.5)	105 (52.0)

実数は人数/()内は%を表記/複数回答可

しいサイトを開かない”や“有料アプリを利用しない”など、アクセス制限をかけ「利用内容を決めている」と回答したものが17.7%，“学校では利用しない”“自分の部屋では利用しない”といった「利用場所・場面を決めている」が14.6%であった〔Table. 4〕。

② 家庭内でのルールの有無

ネット使用上の家庭内でのルールの有無について質問をおこなったところ、全体の約半数(51.1%)が「特にルールを決めていない」と回答していた。

また、“家庭内でのルールがある”と回答し

ていたものの内訳については“夜21以降は利用しない”“一日に使用できるのは何時間”など「利用時間を決めいている」と回答していたものが最も多く26.4%であった。次いで、“アプリをダウンロードする場合は親の許可を得てから”“有料サイトは使わない”など「利用内容を決めている」が19.5%，“食事中は使用しない”“リビングで使用する”といった「利用場所・場面を決めている」が12.5%であった〔Table. 5〕。

Table. 6 SNSの利用経験の有無

	全体 N=518	性別		学年		
		男子 N=268	女子 N=250	1年生 N=175	2年生 N=142	3年生 N=201
SNSを利用したことがある	335 (64.7)	154 (57.5)	181 (72.4)	70 (40.0)	107 (75.4)	158 (78.6)
SNSを利用したことがない	183 (35.3)	114 (42.5)	69 (24.6)	105 (60.0)	35 (24.6)	43 (21.4)

実数は人数 / () 内は%を表記

Table. 7 SNSの利用目的

	全体 N=335	性別		学年		
		男子 N=154	女子 N=181	1年生 N=70	2年生 N=107	3年生 N=158
友だちや知り合いの近況を知るため	149 (44.5)	70 (45.5)	80 (44.2)	24 (34.3)	56 (52.3)	69 (43.7)
自分の近況を公開するため	20 (6.0)	7 (4.5)	13 (7.2)	3 (4.3)	7 (6.5)	10 (6.3)
友だちや知り合いと繋がっていたいから	177 (52.8)	57 (37.0)	12 (66.3)	39 (55.7)	60 (56.1)	78 (49.4)
新しい人と知り合うため	37 (11.0)	12 (7.8)	25 (13.8)	11 (15.7)	8 (7.5)	18 (11.4)
事務的な連絡をとるため	102 (30.4)	44 (28.6)	58 (32.0)	22 (31.4)	33 (30.8)	47 (29.7)
時間をつぶすため・暇つぶし	130 (38.8)	55 (35.7)	75 (41.4)	25 (35.7)	42 (39.3)	63 (39.9)
友だちに誘われたから	38 (11.3)	21 (13.6)	17 (9.4)	9 (12.9)	9 (8.4)	20 (12.7)

実数は人数 / () 内は%を表記 / 複数回答可

(3) SNS利用の現状について

① SNSの利用有無

ネットユーザーを対象に、SNSを利用して
いるかどうかについて確認をおこなった。その
結果、全体の約6割(64.7%)が「SNSを利用
している」と回答しており、学年が上がるに
つれ、その利用率も高くなっていった。性差にお
いては、女子の利用率の方が有意に高く、全体
の約7割(72.4%)がSNSを利用しているこ
とが明らかになった〔Table. 6〕。

② SNSの利用目的

“SNSを利用している”と回答したものを
対象に、SNSの利用目的について確認をおこ
なった。その結果、全体の約半数(52.8%)が
「友だちや知り合いと繋がっていたいから」と
回答しており、いずれの学年においても最も高
い割合を占めていた。次いで「友だちや知り合
いの近況を知るため」が44.5%、「時間をつぶ
すため・暇つぶし」が38.8%の順となっていた
〔Table. 7〕。

(4) ネット利用と日常生活への影響

① インターネット依存傾向尺度

ネット利用が日常生活にどの程度影響を与えて
いるのかを測る為に、“インターネット依存傾向尺度”
を実施した。その結果、全体の平均としては38.2点
と依存傾向(低度)の値を示していた。性差に関し
ては、女子生徒の方が有意に高く、男子生徒よりも

Table. 8 インターネット依存傾向尺度(尺度得点)

		平均(SD)	t値/F値	人数(%)
全体		38.2 (14.5)	—	518
性別	男子	36.0 (13.8)	-3.57***	268 (51.7)
	女子	40.6 (14.9)		250 (48.3)
学年	1年生	32.1 (13.4)	25.8*** (1年<2・3年)	175 (33.8)
	2年生	41.6 (13.7)		142 (27.4)
	3年生	41.1 (14.4)		201 (38.8)

*** p<.001

Table. 9 SNSの利用有無とインターネット依存傾向

	平均(SD)	t値	人数(%)
SNSを利用している	42.4 (14.2)	9.97***	334 (64.6)
SNSを利用していない	30.7 (11.8)		183 (35.4)

*** p<.001

依存傾向が高いことが明らかになった (t (516) =
3.57, p<.001)。

さらに、学年別にみると1年生と2・3年生
との間に有意な差が認められた。よって、1年生か
ら2年生へと学年が上がる際に、ネットへの依存傾
向が顕著に高くなっていることが明らかになった
(F (2, 515) = 25.8, p<.001)〔table. 8〕。

② SNSの利用有無とネット依存傾向

SNSの利用有無によってネット依存傾向の程度
に差異があるか検討をおこなった。その結果、SNS
を利用している生徒は、そうでない生徒と比べると
有意に依存傾向の得点が高いことが明らかになった
(t (436) = 9.97, p<.001)。

③ ネット利用上のルールの有無と日常生活への影響

ネット使用上のルールの有無によって、日常生活への影響程度に差異があるのか検討をおこなった。

ここでは“自分自身が定めたルール(自己ルール)”さらには“家庭内におけるルール(家庭内ルール)”の有無をもとに4パターンの群をつくり、インターネット依存傾向尺度の得点を比較した〔Table. 10〕。

Table. 10 ネット利用上のルールの有無とインターネット依存傾向

N=519	平均	(SD)	人数 (%)
自分のルールのみ	37.7	14.7	63 (12.1)
家庭のルールのみ	41.4	14.0	53 (10.2)
自分・家庭のルールあり	36.4	13.3	201 (38.7)
自分・家庭のルールなし	39.6	15.5	202 (38.9)

その結果、「自己ルール」と「家庭内ルール」の両方があるとした生徒は、4群中最もネット依存の傾向が低いことが明らかになった。一方で、「家庭内ルールのみ」と回答した群におい

ては、尺度得点が最も高くなる結果となった。

2) 中学生のネットいじめの実態

(1) 被害経験について

① 被害経験の有無・被害内容・被害時の所感

ネットユーザーを対象に、ネットいじめの“被害経験の有無”について確認をおこなった。その結果、全体の16.2% (男子13.8%・女子18.8%)が、これまでに「ネットいじめの被害にあったことがある」と回答していた。学年別にみると、2年生が22.5%と最も多く情報通信機器の所有率および使用頻度が他の学年と比べて顕著に増加するのに併せて、ネットいじめの被害者数も増加していることが明らかになった〔Table. 11〕。

また、その被害内容について確認したところ、いずれの学年においても「悪口や傷つく言葉、根拠のない噂を書き込まれた」といったネット上の誹謗・中傷による被害が最も多く、“被害経験がある”と回答した生徒の73.8%を占めていた。次いで「個人情報が無断で流された」が

Table. 11 ネットいじめの実態 (被害経験の有無)

	全体 N=518	性別		学年		
		男子 N=268	女子 N=250	1年生 N=175	2年生 N=142	3年生 N=201
ネット被害にあったことがある	84 (16.2)	37 (13.8)	47 (18.8)	14 (8.0)	32 (22.5)	38 (18.9)
ネット被害にあったことがない	434 (83.8)	231 (86.1)	203 (81.2)	161 (92.0)	110 (77.4)	163 (81.1)

実数は人数 / () 内は%を表記

Table. 12 ネット被害の内容

	全体 N=84	性別		学年		
		男子 N=37	女子 N=47	1年生 N=14	2年生 N=32	3年生 N=38
悪口や傷つく言葉、根拠のない噂を書きこまれた	62 (73.8)	29 (78.4)	33 (70.2)	12 (85.7)	26 (81.3)	24 (63.2)
個人情報(写真・動画も含めて)を無断で流された	17 (20.2)	8 (21.6)	9 (19.1)	—	7 (21.9)	10 (26.3)
ネット上で仲間はずれにされた	13 (15.5)	2 (5.4)	11 (23.4)	2 (14.3)	6 (18.8)	5 (13.2)
他人に無断で自分の名前やID・パスワードを利用された	7 (8.3)	1 (2.7)	6 (12.8)	—	3 (9.4)	4 (10.5)
その他	1 (1.2)	—	1 (2.1)	1 (7.1)	—	—

実数は人数 / () 内は%を表記 / 複数回答可

Table. 13 ネット被害時の所感

	全体 N=82	性別		学年		
		男子 N=36	女子 N=46	1年生 N=14	2年生 N=32	3年生 N=36
とても傷ついた	36 (43.9)	13 (36.1)	23 (50.0)	8 (57.1)	16 (50.0)	12 (33.3)
少し傷ついた	40 (48.8)	18 (50.0)	22 (47.8)	6 (42.9)	16 (50.0)	18 (50.0)
あまり傷つかなかった	4 (4.9)	3 (8.3)	1 (2.2)	—	—	4 (11.1)
全く傷つかなかった	2 (2.4)	2 (5.6)	—	—	—	2 (5.6)

実数は人数 / () 内は%を表記

20.2%、「ネット上で仲間はずれにされた」が15.5%を占める結果となっていた〔Table. 12〕。

さらに“被害時の所感”については、上位2つの「少し傷ついた(48.8%)」と「とても傷ついた(43.9%)」を合わせると約9割近くの生徒が、ネットいじめを受けた際に傷つき体験をしていることが明らかになった〔Table. 13〕。

② ネットいじめ被害時の対応

“ネットいじめの被害経験がある”と回答したものを対象に被害時にどのような対応をおこなったかについて確認をおこなった。

その結果、被害生徒の約半数(51.2%)が「誰にも相談しなかった(相談できなかった)」と回答しており、いずれの学年においても最も多くを占める結果となった〔Table. 14〕。

“相談しなかった(できなかった)”理由については、「相談しても解決しないと思ったから

(39.5%)」が最も多くを占めており、次いで「相談してさらに広がるのが怖かったから(32.6%)」が続いていた〔Table. 15〕。

また、被害時の対応として、次いで多かったものに“相談した(39.3%)”があがった。具体的に誰に相談したかを確認したところ、全体の約6割(63.6%)が「友だち」と回答しており、次いで「保護者(54.5%)」が被害時の相談者としてあがっていた〔Table. 16〕。

(2) 加害経験について

① ネット上における問題行動の経験有無

ネットユーザーを対象に、ネット上における問題行動の経験有無(加害経験の有無)について確認をおこなった。

その結果、全体の6.4%が「ネット上で問題となる行動をしたことがある」と回答していた。

Table. 14 ネットいじめ被害時の対応

	全体 N=84	性別		学年		
		男子 N=37	女子 N=47	1年生 N=14	2年生 N=32	3年生 N=38
相談した	33 (39.3)	7 (18.9)	26 (55.3)	5 (35.7)	15 (46.9)	13 (34.2)
削除してもらうように依頼した	13 (15.5)	7 (18.9)	6 (12.8)	2 (14.3)	4 (12.5)	7 (18.4)
警察に対応を求めた	—	—	—	—	—	—
誰にも相談しなかった(相談できなかった)	43 (51.2)	24 (64.9)	19 (40.4)	7 (50.0)	15 (46.9)	21 (55.3)
その他	—	—	—	—	—	—

実数は人数／()内は%を表記／複数回答可

Table. 15 被害時に相談しなかった(できなかった)理由

	全体 N=43	性別		学年		
		男子 N=24	女子 N=19	1年生 N=7	2年生 N=15	3年生 N=21
どこに相談したらいいのか分からなかったから	3 (7.0)	3 (12.5)	—	1 (14.3)	2 (13.3)	—
相談してさらに広がるのが怖かったから	14 (32.6)	6 (25.0)	8 (42.1)	—	4 (26.7)	10 (47.6)
心配をかけたくなかったから	4 (9.3)	2 (8.3)	2 (10.5)	1 (14.3)	2 (13.3)	1 (4.8)
相談しても解決しないと思ったから	17 (39.5)	10 (41.7)	7 (36.8)	1 (14.3)	6 (40.0)	10 (47.6)
その他	5 (11.6)	3 (12.5)	2 (10.5)	4 (57.1)	1 (6.7)	—

実数は人数／()内は%を表記

Table. 16 ネットいじめ被害時の相談者

	全体 N=33	性別		学年		
		男子 N=7	女子 N=26	1年生 N=5	2年生 N=15	3年生 N=13
保護者	18 (54.5)	3 (42.9)	15 (57.7)	3 (60.0)	7 (46.7)	8 (61.5)
きょうだい	3 (9.1)	—	3 (9.1)	—	—	3 (23.1)
先生	3 (9.1)	—	3 (9.1)	2 (40.0)	1 (6.7)	—
友だち	21 (63.6)	4 (57.1)	17 (65.4)	1 (20.0)	11 (73.3)	9 (69.2)
スクール・カウンセラー	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—

実数は人数／()内は%を表記／複数回答可

学年別においては、2年生が10.6%と最も多く、1年生から2年生にかけてその割合が顕著に増加していた〔Table. 17〕。

② 問題行動の内容とその動機（理由）

ネット上で“問題行動をしたことがある”と回答した生徒を対象にその内容について確認をおこなった。

その結果、約8割（78.8%）が「友だちや知人の悪口や愚痴を書き込んだ」と回答しており、次いで「許可なく無断で写真や動画を撮影した（18.2%）」「他人の個人情報や写真を無断で流した（15.2%）」が続く結果となっていた〔Table. 18〕。

また、その問題行動に至った動機について確認したところ「イライラしていたから（45.5%）」と「特に何も意識をしていなかった（45.5%）」が同値で最も多く、次いで「“仕返し”をしたかったから（21.2%）」が続く結果となっていた〔Table. 19〕。

4. 考 察

1) 中学生のネット利用の実態について

(1) ネット普及とコミュニケーション様式の変化

本研究によると、調査対象の約9割の生徒が携帯電話やパソコン・タブレット端末といった情報通信機器を所有しており、そのうちの約半数の生徒が“ほとんど毎日ネットを利用している”ということが明らかになった。このような背景からも、今日誰もが容易にインターネットを使用することができ、先に挙げたような多種多様な機器は、現代社会を生きる中学生にとっても“必要不可欠なツール”“生活上の必須アイテム”として普及していることが示唆された。

さらに、近年、ネットユーザー間でめまぐるしく普及しているTwitterやLINE,FacebookなどをはじめとするSNS〔ソーシャル・ネットワーキング・サービス〕に関しても、学年が上がるにつれ利用率が増え、3年生においては全体の約8割もの生徒が利用していることが明

Table. 17 ネットいじめ（加害経験）の有無

	全体 N=518	性別		学年		
		男子 N=268	女子 N=250	1年生 N=175	2年生 N=142	3年生 N=201
ネット上で問題となる行動をしたことがある	33 (6.4)	14 (5.2)	19 (7.6)	2 (1.1)	15 (10.6)	16 (8.0)
ネット上で問題となる行動をしたことがない	485 (93.6)	254 (94.8)	231 (92.4)	173 (98.9)	127 (89.4)	185 (92.0)

実数は人数／（ ）内は%を表記

Table. 18 ネット上での問題行動の内容

	全体 N=33	性別		学年		
		男子 N=14	女子 N=19	1年生 N= 2	2年生 N=15	3年生 N=16
友だちや知人の悪口や愚痴を書きこんだ	26 (78.8)	9 (64.3)	17 (89.5)	2 (100.)	12 (80.0)	12 (75.0)
他人の個人情報や写真を無断で流した	5 (15.2)	4 (28.6)	2 (10.5)	—	—	5 (31.3)
SNS上で仲間はずしをした	3 (9.1)	2 (14.3)	1 (5.3)	1 (50.0)	2 (13.3)	—
他人になりすまして書きこんだ	2 (6.1)	—	2 (10.5)	1 (50.0)	1 (6.7)	—
許可なく無断で写真や動画を撮影した	6 (18.2)	5 (35.7)	1 (5.3)	—	4 (26.7)	2 (12.5)

実数は人数／（ ）内は%を表記／複数回答可

Table. 19 ネット上で問題行動をおこなった動機

	全体 N=33	性別		学年		
		男子 N=14	女子 N=19	1年生 N= 2	2年生 N=15	3年生 N=16
相手を傷つけたかったから	2 (6.1)	1 (7.1)	1 (5.3)	—	2 (13.3)	—
“仕返し”をしたかったから	7 (21.2)	—	7 (36.8)	1 (50.0)	2 (13.3)	4 (25.0)
イライラしていたから	15 (45.5)	4 (28.6)	11 (57.9)	—	9 (60.0)	6 (37.5)
直接気持ちを伝えられなかったから	3 (9.1)	—	3 (15.8)	—	2 (13.3)	2 (12.5)
特に何も意識をしていなかった	15 (45.5)	9 (64.3)	6 (31.6)	2 (100.)	4 (26.7)	9 (56.3)

実数は人数／（ ）内は%を表記／複数回答可

らかになった。また、その利用目的も“友だちや知り合いと繋がっていたいから”と過半数の生徒が述べていたことから、現実世界のみならずネット内という、いわばバーチャル(仮想的・擬似的な)な世界においても、“友だちとの繋りを感じていたい”という、中学生の対人関係様式の特徴を垣間みることができた。

青木(2011)は、このようなバーチャルな世界でのコミュニケーションの魅力の一つとして“日常と少し異なるかたちで自分を解放させ、自分の興味や関心を他人の目を気にしないで満たすことが出来る”ことを述べており、そこでの所属感や連帯感が、リアルな世界を動かすこともあると指摘している。また、笹倉(2011)は、SNS上に記事を書く効用について、自分の問題や感情を整理し明確にするといった“自己理解の作用”や“浄化作用”、さらには“自分に共感してくれる他者と出会い、親しくなれる”ことを挙げており、SNSを利用する目的の一つとして、他者から理解される体験が出来ることも重要な動機づけとなっていることを指摘している。

現代社会を生きる子どもたちの“対人関係の希薄化”が数多く論考される中^{11,12,13)}、ネット上にできたバーチャルな世界においては、たくさんの生徒たちが他者との繋がりを強く求めているという様相を踏まえると、“ありのままの自分を開放し自己表現したい”“誰かに受けとめてもらいたい”という思いが、生徒たちのこのころの底に存在しているのではないかと考える。

(2) ネット利用のあり方と日常生活への影響について

中学生の生活のなかに、様々な情報通信機器が着実に普及・浸透してきている今、インターネットを通して“いつでも・どこでも・だれとでも”容易に情報を収集・発信したり、誰かと連絡を取り合ったりすることが可能になった。

さらに、前項でもあげたようにSNSを利用する目的として“他者との繋がり”を多くの生徒が求めていることを踏まえると、ネットは、中学生が日常生活を送る上で切っても切り離すことのできない存在として位置づけられていることが窺える。

このような背景から近年、中高生のネット利用とメンタルヘルス上の問題、さらには対人関

係への影響について多くの報告がなされており^{14,15,16)}、ネット利用のあり方によっては日常生活をおくる上でのリスクファクターとなりうるということが指摘されている。

このような指摘をうけて、本研究においては情報通信機器の利用実態とネット依存傾向の程度について検討を試みた。その結果、2・3年生は1年生と比べてネット依存の傾向が有意に高くなっていることが明らかになった。さらに、SNSを利用している生徒は、そうでないものと比べると有意にネット依存の傾向が高くなることが示唆され、それだけSNSには依存性が高くなる要素・リスクが含まれているということが窺えた。

また、2年生以降ネット依存の傾向が有意に高くなった一つの要因として、情報通信機器の所有者が格段に増加したことに伴い、ネットの利用頻度さらにはSNSユーザーが顕著に増えたことが背景にあるのではないかと考える(Table. 1, 2, 9)。

“携帯やパソコンをはじめとする通信機器を所有すること”つまり“いつでもネット利用ができる環境下に置かれる”ということは、“ネット依存に陥る可能性やその他様々なネット上のトラブルに遭遇する危険性と常に隣り合わせの状態にある”ということを生徒一人ひとりが、そして周囲の大人たちも十分に認識し、その“功・罪”を十分に理解した上で様々な機器を利用する必要があるのではないかと考える。

2) 実態からみる“ネットいじめの特質”

本調査では、中学生におけるネットいじめの実態について“被害経験”“加害経験”という大きく2つの視点から実態把握をおこなった。

本項においては、それぞれの視点ごとに本調査から得られた実態について述べ、その中からみえるネットいじめの特性について論考していきたい。

(1) ネット被害の実態からみえる被害者心理

本調査の結果によると、ネットを利用している生徒の16.2%が何らかの“ネット被害の経験がある”としており、その被害内容は“悪口や傷つく言葉、根拠のない噂を書きこまれた”といった、ネット上における誹謗・中傷によるものが圧倒的に多く、次いで“個人情報無断で流出された”という内容が続く結果となった。

また、被害生徒の約9割が“傷ついた”と心的苦痛を感じていながらも、“相談してさらに広がるのが怖い”“相談しても解決しない”との理由で、被害を受けた生徒の約半数がその状況を一人で抱え過ごしていることが明らかになった。

このような知見から、「相手が分からないという匿名性への恐怖感」や「瞬時に様々な情報が広まるかもしれないといった不安」さらには、一度ネット上に流出された情報は回収困難という「泣寝入りや諦めに似た思い」が存在していることが見受けられ、被害時に生徒自らが助けを求めて動くことへの躊躇・戸惑いや無力感が存在していることが示唆された。また、被害生徒がなかなか相談へと踏み出せない背景には、誰かに相談した場合の報復への恐れや伝播性への不安が大きく存在していることが見受けられた。誹謗・中傷の場が友人同士で構成されたネットグループ、あるいは誰もが目にするのできるネットコミュニティであれば、“心無い言葉を書いたのは一体誰なのか”という疑心暗鬼な思いや周囲への不信感から、なおさら相談することへの躊躇や戸惑いは強くなるのではないかと考える。

以上のような知見を踏まえると、従来の現実場面におけるいじめよりも、さらに見えにくい水面下においてネットいじめが繰り広げられている可能性が高いことが窺えた。宮木(2007)は、このようなネットいじめの特性を「“静かに激化”するサイバーいじめ」と表現し、被害者は“ネット上”という“プライベート空間”で絶えず攻撃を受け、落ちついて過ごすことのできる家や自室までもが安全な場所でなくなることを指摘している。つまり、自身の誹謗・中傷が書きこまれていることを知った被害生徒は、その時の精神的ダメージに加えて“さらに自分のことが新たに書きこまれていないか”“誹謗・中傷に対する周囲の反応はどうか”という思いが四六時中つきまとい、不快な思いをしながらも強迫的にネットをチェックしてしまうという負のスパイラルに陥る可能性があるのではないかと考える。この点については、三島(2010)も指摘しており、被害時の自己防衛の手段としてネットや掲示板等を見ないという方法もあるが、見ずにはいられない心境からこの

方法が採られにくいことを述べている。

以上のような知見・指摘を踏まえると、被害生徒の対応にあたる際の一手立てとして、先述したような被害生徒の心境を十分に踏まえた上で、まずは生徒の安心の場や逃げ場を確保することが優先的に必要であり、その上で対応にあたることが大切になるのではないかと考える。

- (2) ネット上における問題行動(加害経験)の実態
ネットを利用している生徒のうち、6.4%が“ネット上で問題となる行動をしたことがある”と回答し、2年生においては他学年と比較すると最も多く10.6%という結果となった。問題行動の内容としては“友だちや知人の悪口や愚痴を書きこんだ”というネット上における誹謗・中傷が圧倒的に多く、その行動に至った動機としては“特に何も意識をしていなかった”“イライラしていたから”との理由が全体的に多くを占めていた。

このような背景を踏まえると、ネット世界での誹謗・中傷がいかにか軽率に、そして無意識的・衝動的におこなわれているのか、その実態をうかがい知ることができる。つまり、相手の顔が見えないというネット世界の特性からくる“リアリティの低さ”が、こうした問題行動の背景にあるのではないかと考える。

宮木(2007)は、ネットいじめの大きな特徴として、活字を武器にすることに対する「罪の意識の低さ」を指摘している。さらに、匿名性ということ踏まえると、自分の身分を隠すことも可能なため、いじめる側の「見つかるリスク」「罰せられるリスク」も低くなり、いわゆる「いじめやすい」状況がネット世界には成立しやすいのではないかと考える。

また“イライラしていたから”といった理由からもうかがえるように、情報発信する側の「予測する力」や「想像力」そして「自己統制力」の欠如もトラブルを招く一要因として考えられるのではないかと考える。つまり、“こういう言葉を載せたら相手はどう思うだろう”“こういう情報を発信したらこんな結果になるかもしれない”というように、一度立ち止まり先のことを予測することなく、その場しのぎ的に感情のままに思いを発信することで、結果的に多くの被害者を生み出していることが考えられる。

以上のような知見を踏まえると、他人の反応

や気持ちを気につけない、慎重さに欠く軽はずみな“つぶやき”“情報発信”により、様々なネット上のトラブルが派生していることが窺えた。“携帯やパソコンの小さな画面の先には不特定多数の生身の人間が存在している”ということを生徒一人ひとりが心に留め、自身が発する言葉に重みと責任をもつ意識が大切なのではないかと考える。

3) ネットいじめを予防・低減するために

(1) “自律”を促す“ルールづくり”が一助に

我々の生活の中に様々な情報通信機器やネットが普及・浸透した今、ただ単純に“携帯やパソコンを持たせない”といった排他的な制限や禁止だけでは、ネット上の様々なトラブルの根本的な予防・低減には繋がらないと考える。例え機器を取り上げたとしても、ひとたび外に出れば至るところにネットを利用することができる環境が整っており、生徒たちは様々な知恵と手法を駆使してその制限・禁止をすり抜け、さらには周囲の大人の目の届かない水面下にて隠れて利用することになるのではないかと考える。ここで大切なことは、携帯やパソコンそしてSNSを利用することが問題なのではなく、安全にそしてその利便性を活かすために、これらの機器を“いかに利用するのか”という視点なのではないか。その一手立てとして、ネット利用におけるルール設定があると考えられる。

本研究では、ネット利用におけるルールの有無が日常生活にどう反映するのか“ネット依存傾向”という指標を用いて検討を試みた〔Table. 10〕。その結果、ネットを利用する上で“自分さらには家庭のルールがある”と回答した群はネット依存の傾向が最も低くなることが明らかになった。この部分だけを捉えると、“家族”と“自分自身”のルールがあればそれだけで日常生活への影響（ネット依存の傾向）が少なくなると解釈しがちである。しかし、本調査においては“家庭でのルールのみ”と回答した群が最も依存傾向が高くなる結果となり、ネット利用におけるルール設定のあり方を検討する上で大変興味深い内容となった。この点に関しては、今後さらに注意深く検討していく必要があるが、このような結果から、ルールが“ある”か“ないか”といった単一的なことよりも、そのあり

方がルール設定をする上で重要なポイントになってくるのではないかと考える。つまり、家族や周囲にいる大人たちが一方的に“～時以降はネットを使ったらいけません”“自分の部屋に携帯を持って行ってはダメ”という掟（決まり）をいくら設けても、子どもはそれがルールだと認識していない場合も多く、ルールとしての本来の機能が果たされにくいということが考えられる。また、一人ひとりの置かれている環境や情報通信機器の用途も異なれば、画一的な規制で生徒たちを縛るのには無理がある。家庭や学校の意見・要望を聞きながら、子どもたち自身が自主的にルールを決め、成長やニーズに応じて適宜、設定変更していくことが大切なのではないか。

しかしながら、現代の子どもたちの友人関係のあり方を踏まえると、自分が自主的に決めたルールのみならず、家族や学校そして友だち同士で決めたルールこそが、時に大きな役割を果たす場合があるのではないかと考える。今回の調査から、“他者との繋がり”を求める子どもたちが数多く存在していることが明らかになった。つまり、繋がりを求める場がバーチャルな空間であるとするならば、SNSやネット上でのやり取りが終わりなく、エンドレスに繰り返される可能性が高いということである。このような場合、他者との繋がり求めるあまり“文脈の流れを乱してはいけない”“周囲との遅れをとってはならない”といった思いから、内心は“そろそろ終わりにしたい”と感じていながらも、友人間で派生する同調圧力や群れ志向からその流れを自分で断ち切ることが難しく、ネット世界から自分一人が抜け出すことに相当なエネルギーを使うことが予測される。このような時に、家族とともに決めたルールや友だち同士で話し合っただけの共有ルールを生かせれば、お互いに話を切り出しやすくなり、子どもたちの“助け舟”や“切り札”として大きな役割を果たすのではないかと考える。

(2) “情報モラル教育での学び”が日常で生かされるために

ネットいじめへの早急な対応が求められている今、“メディアリテラシー”や“情報モラル教育”が重要視され、全国各地の学校現場や教育機関において、その取り組みがなされている。

本稿においては紙幅の都合上、詳細について触れてはいないが、調査実施の際に「ネット上でのいじめを予防・低減するためにはどのようなことを心掛けたらよいと思うか」という問いを生徒たちに投げかけた。その結果、“相手の気持ちを考えてネット利用することが大切”

“ネット上で愚痴や傷つけることを書かないことが大切”といった内容を多くの生徒たちが記述しており、予想以上の回答数の多さに筆者はとて驚いた。このような記述が多くみられた背景には、先述したような情報モラル教育や様々な取り組みの過程が土台となっていることは言うまでもないが、得られた記述内容から大半の子どもたちはすでに情報モラルや安全な情報通信機器の使い方を、頭では理解している様子が見受けられた。原(2012)は、こういった様相について「なぜ、モラルや使い方を知っているにもかかわらずネットいじめを抑止できないのかという部分に注目すべき時期がきている」と指摘している。頭で“理解”していることと、心での“感情”そして実際の“行動”とを自分自身の力だけで連動させていくことは大人でも時に難しく、心理的・身体的にも未熟で生涯の発達過程の真ただ中を生活している子どもたちにとっては、よりハードルが高いこともある。つまり、このような発達段階を生きる子どもたちが、モラル教育による学びを実践的に日常の中で習得・習慣化していくには、教室内だけでの教育・学びだけでは限界があるのではないかと考える。携帯やネットに接する場の大半が家庭であることを踏まえると、各家庭でのモラル教育を長期的な視点で継続的に進めていくことが、様々なネット上でのトラブルを予防・低減していく上で大切になってくるのではないかと考える。

そのためにも、“学校”と“家庭”との連携が必要不可欠であり、単なる表面的な“How to”の理解だけに留まらない、より日常に近い場面での実践を通じた学びが必要になるのではないかと考える。今後は家庭(保護者)をも巻き込んだ情報モラルの教育がさらに求められる時期となるであろう。

(3) 実態からみえる“対応上の課題”と“早期対応・予防に向けた介入のあり方”について

ここでは、本調査から得られた実態を踏まえて、「ネットいじめの対応にあたる上での課題」

と「早期対応・防止に向けた介入のあり方」について論考していきたい。

まず、対応上の課題の一つとして“相談への繋がりにくさ”が挙げられる。今回の調査結果からも、ネット被害時の対応として多くの生徒が“誰にも相談しなかった(相談できなかった)”と回答しており、その背景には被害内容を周囲に相談することへの不安や戸惑い、そして問題解決に対する諦めに似た思いが存在していることが明らかとなった。この実態を踏まえると、子どもたちが困った際に自らヘルプサインを出しやすいように、いかにしてその環境を整えるかということが非常に大切であることが窺えた。被害にあった時の相談場所を明確に提示して子どもたちの逃げ場の確保をしたり、安心して話ができるような関係性を普段の生活からつくっておく工夫・配慮が必要であると考えられる。

また、周囲の大人たちも子どもたちの些細な変化や異変に気づけるように、日常的に直接的なコミュニケーションをとり、安心して話ができるような信頼関係の構築に努めることが必要である。バーチャルな世界での“繋がりを求める子どもたちの様相を踏まえると、現実場面での他者との繋がりが本来の人と人との関わりの充実をいかにしておこなっていくかという視点が大切になってくるのではないかと考える。

そして、もう一つの大きな課題として、ネットが持つ特性上“迅速な対応が難しい”ということが挙げられる。つまり、ネット上でおきているトラブルの情報が入りやすく、周囲が気づいたときには事態がかなり深刻化している場合が想定できる。この課題を踏まえると、事実把握に努め早期介入していく上でも“どんな情報がネット上に掲載されているのか”ということを直ぐに確認できるようにしておく必要がある。ネット世界で加害者は、“なりすまし”や“アカウントの変更・消去”“SNS上での退出”といったあらゆる手法で、雲隠れすることが可能である。また、ネット上の設定やセキュリティ・ブロックから問題となっている画面を学校では閲覧することができない場合が多々あることも考えられる。このような背景から、ネットいじめや誹謗中傷の書き込みを発見した際には、その内容やURL(アドレス)を直ぐに保存し記

録として残しておくことで、掲載内容の確認がスムーズとなり、書き込み削除に向けた対応やいじめの解消に向けた早期介入が可能となると考える。

さらに、状況によっては学校や家庭内だけに留まることなく、警察や専門的な機関と連携・協力し解決に向けて取り組んでいくことも、迅速な対応をおこなう上での一助となる。

近年においては、ネットトラブルの増加や深刻化から、SNSの運営管理会社や情報検索サイトといったネット関連会社や、さらには法的分野においても、予防・解決に向けた改善・対応が求められる風潮となり、ネット上の様々なトラブルについて子どもから大人までもが家庭や学校そして社会全体を巻き込んで、ともに考えていく時代となったのではないかと考える。

5. 今後の課題

近年、携帯やタブレット端末をはじめとする情報通信機器の所有が低年齢化しているといった社会的背景を踏まえると、今後は小学生や高校生、さらには大学生といった幅広い年齢層を対象とした実態把握が必要であろう。また、ネットいじめを予防・低減していくためには、家庭と学校での連携が重要になってくるという今回の知見を踏まえると、家庭や学校での情報モラル教育のあり方やトラブル対応の実態についての把握も必要であり、予防・低減に向けた対策・手立てについて、さらに検討を深めていくことが今後の課題となるであろう。

<付記>

本稿をまとめるにあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました中学校の生徒のみなさん、教職員の先生方、関係者の皆様お一人おひとりに深く感謝申し上げます。

注1)

ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)インターネット上につくられた、オンライン・コミュニティのこと。代表的なものとして、Twitter〔ツイッター〕・LINE〔ライン〕・Facebook〔フェイスブック〕などがある。

参考文献

- 1) 総務省「インターネットの利用動向」, 平成26年版情報通信白書, 337-353, 2014
- 2) 文部科学省「情報通信技術の活用の推進」, 平成25年度文部科学白書, 388-400, 2014
- 3) 法務省・文部科学省「インターネットによる人権侵害」, 平成25年版人権教育・啓発白書, 46-47, 2014
- 4) 文部科学省, 『ネット上のいじめ』から子どもたちを守るためにー見直そう! ケータイ・ネットの利用のあり方をー子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ〔第2次〕, 2008
- 5) 大和剛彦, 『いじめ撲滅に向けた取組例ー「いじめ」と「ネット」は、相性が良いー』, 教員志望者のための情報・教養誌教職課程, 37 (2), 28-29, 2011
- 6) 宮木由貴子, 『「静かに激化」するサイバーいじめ』, ライフデザインレポート, 178, 35-37, 2007
- 7) 文部科学省「いじめ防止対策推進法(平成25年法律第71号)」, 2013
- 8) Young, K.S. Caught in the net : how to recognize the signs of Internet Addiction and a winning strategy for recovery. John Wiley & Sons. 1998 (小田嶋由美子(訳)『インターネット中毒ーまじめな警告ですー』毎日新聞社)
- 9) 青木紀久代, 『インターネット社会と心理臨床』, 心理臨床の広場, 4 (1), 12-13, 2011
- 10) 笹倉尚子, 『インターネットを介した自己表現』, 心理臨床の広場, 4 (1), 14-15, 2011
- 11) 岡田 努, 『現代青年の友人関係に関する考察』, 日本青年心理学会, 519, 43-55, 1993
- 12) 廣實優子, 『現代青年の交友関係に関する心理学的要因の展望』, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3 (51), 254-257, 2002
- 13) 落合良行・竹中一平, 『青年期の友人関係研究の展望』, 筑波大学心理学研究, 28, 55-67, 2004
- 14) 鄭 艶花, 『インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究』, 心理臨床学研究, 26, 72-83, 2008
- 15) 袖山紀子, 『いわゆる「インターネット中毒」の1例』, 精神医学, 45, 995-997, 2003

- 16) 総務省情報通信政策研究所, 『高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書』, 2014
- 17) 原 清治, 『ネットいじめの実態とその要因(Ⅱ)』, 佛教大学教育学部学会紀要, 11, 13-20, 2012